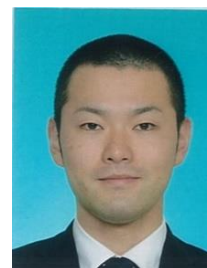


## 世界に一番近い“SATOYAMA”の魅力を活かした地域づくり



千葉県市原市 若月 利樹

### 1. はじめに

昭和初期までの市原市は、広大な面積や自然環境を活かした農業を中心とする第一次産業のまちとして栄えてきたが、昭和中期に東京湾に面した臨海部の埋め立てが行われ、市の北部に京葉コンビナート地帯が形成されると、その後は急速に工業化が進み、工業都市としての発展を遂げることとなった。

しかし、工業化が進んだ現在においても、工場が連なる北部地域とは対照的に、市の南部には豊かな自然が多く広がっている。南部地域では、今日に至るまで住民達が周囲の環境を大切に守りながら、里山の恩恵を受け、里山と共に生きる暮らしを続けてきており、その豊富な地域資源や羽田・成田の両空港の中間に位置する好立地を活かし、これらの自然や、そこで培われた歴史と文化、芸術との交流や体験を主要なコンテンツとして展開する観光地づくりを目標に、「世界に一番近い“SATOYAMA”プロジェクト」と題した取り組みが進められている。だが、地域資源を活用した活性化が期待されているにもかかわらず、北部地域の工業化や再開発の波に押された南部地域の活気は徐々に失われつつあり、人々が大切に守り抜いてきた里山も、年々減少を続けている。

そこで、本レポートでは市原市の里山を今後も維持し、資源を活用した地域の活性化に繋げるために、市の南部地域に焦点を当て、地域を持つ魅力を活かすための取り組みの実現と、抱えている課題解決のために今後必要と思われる施策について提言を行う。

なお、本レポートでは市内を 10 支所ごとの圏内の地区に分け、それらを市の北部・中央部・南部地域に分類している。地区の分類と名称は以下の通りとする（図 1 参照）。

地域分類と地区名称	
地域	地区名称
北部	市原 五井 姉崎
中央部	ちはら台 市津 辰巳台 三和 有秋
南部	南総 加茂

図 1 地区の分布



出典：市原市社会福祉協議会 HP

※国分寺台地区は五井地区に含む

## 2. 市原市の概況

### (1) 地域ごとの特徴

市原市北部地域の臨海部には巨大な京葉コンビナート地帯が広がり、地域内には工場のほか、多くの住宅地が存在する。市内にある JR の 3 駅は全て北部地域内にあるため都市化が進んでおり、その人口は非常に多く、市の総人口の 60%以上を北部地域の住民が占めている。

工業地帯を離れ、南下するに連れて徐々に山林の割合が多くなるが、市の中央部には宅地が整備されている地区も多く、住宅地が点在している。しかし、同じ中央部でも南部地域に接している三和地区には農地が広がっており、農業が盛んに行われている地区である。

南総地区以南の南部地域は、工業地帯や住宅地が広がる北部地域とは対照的な農村地帯であり、地域内には市内でも最も多くの自然が残っている。また、農地や山林のほか、市内に数多く存在するゴルフ場のほとんどがこの地域内に存在しているのが特徴である（図 2 参照）。

図 2 山林等の分布



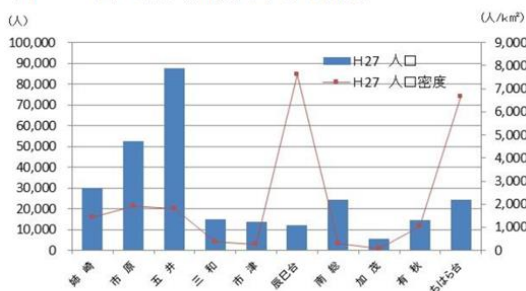
出典：市原市緑の基本計画

### (2) 人口の変化

工業化が進んだことによる急速な都市形成に伴い、市原市の人口は爆発的に増加した。昭和 38 年の市制施行当時は約 7 万 3 千人であった市の人口は、平成 10 年には約 28 万人まで増加したものの、その後は徐々に減少を続け、現在の人口は 277,039 人(平成 30 年 4 月 1 日現在)であり、平成 27 年の国勢調査では千葉県内でもワーストの減少数となるなど人口減少が加速している。

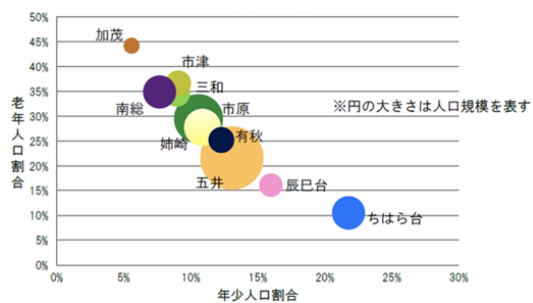
しかし、地区ごとに直近の 10 年間の人口の推移を見ると、北部や中央部の地域には人口減少が比較的緩やかな地区が多く、中には大幅に人口が増加している地区もあるものの、中央部の三和地区や南部の南総・加茂地区では、人口減少が市内でも特に進行している。中でも最南端の加茂地区は人口減少率が最も高い上に、人口と人口密度は最も数値が小さく、少子高齢化の影響で小学校が廃校になるなど、南部地域周辺における過疎化が深刻になっている（図 3・図 4・別添資料：表 1 参照）。

図 3 地区別人口及び人口密度



出典：市原市人口ビジョン

図 4 地区別人口構成



出典：市原市人口ビジョン

また、住宅地の人口密度の低下を防ぐために、北部地域内の JR3 駅の周辺地域を対象としたコンパクトシティ化が計画されていることから、今後さらに北部地域に人口が集中し、今以上に南部地域との格差が広がることが予想される。

### (3) 南部地域の過疎化による里山への影響

南部地域の人口が減少して過疎化が進行したことにより、これまで地域住民によって守られてきた里山の次世代の担い手が不足しており、特に農業への影響が顕著に出ている。

市原市では工業化が進んだ現在も比較的農業が盛んに行われており、市内の農家数は千葉県内で 2 番目に多く、経営耕地面積は 7 番目に広い。しかし、市内の農家のうち、約半数が三和・南総・加茂地区に存在しており、総人口の約 15%の住民が市の農業を支えているという現状である。また、これらの農業が盛んに行われている地区はいずれも前述の人口減少の影響が大きいことから、農家数・経営耕地面積ともに大幅に減少しており、それに伴い耕作放棄地面積が増加している（別添資料：表 2 参照）。市内における耕作放棄地は 10 年間で約 17.8%増加し、県内の自治体の中でもワーストの増加率となっているほか、有害鳥獣の生息区域も年々拡大しており、平成 27 年中に農作物に与えられた有害鳥獣による被害額は約 4,650 万円で、過去の同様の調査と比較しても最も高額となった。中でもイノシシによる被害が深刻で、被害全体の約 7 割（約 3,210 万円）を占め、千葉県中南部市町村平均の 1,001 万円を大きく上回り、県内でもワーストの被害額となっている。農業産出額が年々減少傾向にある上に、有害鳥獣による被害が拡大し続けることで、今後更なる耕作放棄地を生む可能性が高まり、その結果里山の景観が損なわれるなど、農地のみでなく地域全体に影響を及ぼす負のスパイラルとなる危険性がある。

さらに、農業就業人口の平均年齢は 68.4 歳であり、県内平均と比べても高齢化が進んでいることから、今後も高齢化や人口減少の影響を大きく受けると思われる。近年では、新規就農や若手の担い手育成を目指す動きも少しずつ出てきているものの、高齢化や後継者不足等の理由で離農する農家がそれ以上に増えているという現状である。

## 3. 市原市の農業の特徴と課題

### (1) 南部地域の農業

南部地域内では、市の主要産品である水稻のほか、自然薯や椎茸などの栽培が盛んであり、地域の特徴でもある豊かな自然の恵みを活かした農業が行われている。しかし、近年は様々な問題に直面しており、それらの課題解決のための取り組みが求められている。

まず初めに、市内には耕地面積が小規模である農家が多いという特徴がある。徐々に農業の集約化を進めており、1 経営体あたりの経営耕地面積を増加させる取り組みを行っているものの、県内の平均と比べると依然少なく、小規模であると言える（別添資料：表 3 参照）。その原因として、大規模区画化基盤整備（土地改良）が進んだ地域もあるものの、南部地域には谷津田に広がる農地が数多く点在していることから、土地改良が困難で、大規模化が進みにくいという状況が見受けられる。また、販売農家のうち農作物の販売金額が 100 万円以上の経営体数は、県内の平均を大きく下回っている。特に三和・南総・加茂地区で

は、約 83%の農家の販売金額が 100 万円未満であり、耕地面積を拡大出来ず、小規模生産で販売金額が少額な経営体が多数を占めているという現状である（別添資料：表 4・表 5 参照）。

次に、販売金額が少額であることに起因して、兼業農家の割合が高いという点も市原市の農業の特徴として挙げられる。専業農家との割合を比較すると、兼業農家が全体の約 84%を占めており、特に第二種兼業農家（農業以外の所得を主とする兼業農家）の割合が高く、県内の平均を約 14%上回っている。農業所得だけでは生活が難しく、他の所得に依存せざるを得ないという現状であると考えられるが、平成 27 年に行われた市民意識調査では、加茂地区に住む住民のうち約 54%が自宅から職場等が遠いため、仕事のために引っ越したいと回答しており、実際に市内の兼業農家数は近年大幅に減少している（別添資料：表 6 参照）。

現役世代が仕事のために南部地域を離れることで兼業農家が減少し、後継者不足に悩まされる農家の増加にも繋がっていると考えられるが、若者の定住化促進に関する施策への意見調査では、加茂地区の住民のうち 63.4%が重要・やや重要であると回答しているにもかかわらず、現在の施策に不満がある・やや不満があると回答した住民が 38.1%と、共に市内で最も高い数値となっている。

## （2）南部以外の地域の農業

市原市の農業は、1 経営体あたりの経営耕地面積が少なく、特に南部地域では小規模生産で販売金額が少額な経営体が多数を占めているという状況であるが、地区別の農作物販売金額では、工場地帯や住宅地が広がる北部地域内に販売金額が高額な経営体の割合が高い地域が存在する（別添資料：表 7・表 8 参照）。続いては、これらの地域の農業の特徴を確認し、南部地域との違いについて分析を行う。

### ①東海地域の農業

市の北西部にあり、五井地区と姉崎地区の中間に位置する東海地域では、農作物の販売金額が 100 万円以上の経営体の割合が約 54.7%と、県内平均を上回っている。

この地域で行われている農業の特徴として、果樹栽培が盛んであり、経営耕地面積のうちで樹園地が占める割合が高いという点が挙げられる（別添資料：表 9 参照）。また、消費者への直接販売を行っている農家の割合は市全体では約 19.6%であるのに対し、東海地域では約 42.6%の農家が直接販売を行っていることから、生産だけでなく、販売にも力を入れていることがわかる。

### ②姉崎地域の農業

東海地域と同じく市の北西部にあり、姉崎地区の中心に位置する姉崎地域では、農作物の販売金額が 1,000 万円以上の経営体の割合が約 22.7%と、県内平均を大きく上回っている。

この地域の農業の特徴として、野菜栽培が盛んに行われており、経営耕地面積のうちで畑が占める割合が非常に高いという点が挙げられる（別添資料：表 10 参照）。また、姉崎地域周辺で生産し、JA 市原市姉崎集出荷場で洗浄・選別・出荷された大根は「姉崎だいこ

ん」と呼ばれ、高級料亭でも使用されているほか、平成25年には日本農業賞の特別賞を受賞したことから、いわゆる「ブランド野菜」として位置付けられており、地域内では大根料理のコンテストなどのイベントを毎年開催するなど、地域が一丸となって農業を盛り上げている。

### (3) 南部地域の農業の課題解決と里山の活性化に向けた考察

東海地域の事例では消費者への直接販売を行っている農家の割合が高く、姉崎地域では農作物のブランド化によって、それぞれ利益を得ている農家が多数いることが判明したが、これらの地域に共通するのは、農作物を生産するだけでなく、その販売方法を工夫していることではないだろうか。

そこで、市内の農産物の販売方法等について分析を行ったところ、農業生産関連事業を行っている農家は419戸で、その中でも消費者への直接販売以外の事業を行っている農家はわずか12戸であった(別添資料:表11参照)。小規模で限られた耕地面積を活かして利益を生み出すためには農業生産関連事業の推進は不可欠であり、特に農地の拡大が難しい南部地域においては、直接販売だけでなく、より大きな付加価値を生み出すことが出来るような取り組みが有効であると考えられる。

また、里山を活性化させるためには、これらの取り組みと合わせて地域の魅力を引き出し、その魅力を活かした観光事業を実施することで、仕事と人の好循環を生み出す必要があると考えられる。

## 4. 南部地域に対する市民意識調査の結果

次に、平成27年8月に行われた市原市民意識調査の結果から、市民が南部地域に対して具体的にどのような考えを持っているのか、分析を行った。

まず、今後の施策を考える上で活用すべきだと思う市原市の魅力は何か、という質問に対しては、「関東一紅葉が遅い養老溪谷などの豊かな自然」が33.9%と最も多く、次いで「県内でトップクラスの生産量の農業」の30.8%、「小湊鉄道などの郷愁を感じる風景」の26.0%という回答が続き、市原市の魅力の上位3位までを全て南部地域が持つ魅力が占める結果となった。それらの回答の中でも、農業と郷愁を感じる風景に対しては10代が最も魅力的であると回答した割合が高く、2年前に行われた同様の調査よりもそれぞれ約10%ずつ増加していることから、若年層を中心とした若い世代の農村への興味が増しているという結果であった。

また、同じ農村部の持つ魅力の中でも、「里山などの田園風景」について魅力的であると回答した割合は9.3%であり、他の項目と比較するとやや少ない結果であったが、居住期間が3年未満と短い市民は、魅力を感じている割合が高いということも判明した。

次に、市の観光振興を図るためにはどのような施策が有効だと思うか、という質問に対しては、「小湊鉄道の駅舎や車両などを活用した観光地作り」が40.0%と最も多く、次いで「土産品やご当地グルメなどの開発・普及」の35.1%、「自然を体験できるツアープログラムの開発・普及」の25.5%が続き、こちらも農村部の魅力を引き出すことで観光振興に繋

がるという意見が多かった。特に、自然体験と回答した中では60代の回答が最も多いことから、若年層だけでなく、幅広い世代が農村部の持つ魅力を引き出すべきだと考えていることがわかる。

また、10代の回答では自然体験は14.7%と他の世代に対して少なかったものの、今後自分自身が自然体験や農村部での生活体験などをしてみたいという意見は、20代に次いで多い結果であり、日本の自治体では最も多いゴルフ場等を活用したスポーツイベントを推進すべきという回答も29.5%を占め、他の世代よりも多いのが特徴的であった。

なお、南部地域の加茂地区に住む住民からは、「田舎暮らし情報の発信」を推進すべきという回答が31.7%と、他の地区と比べ非常に多く寄せられている。

## 5. 南部地域住民への聞き取り調査

### (1) 農業従事者への聞き取り調査

続いて、実際に南部地域の住民が現状をどのように捉えているのか、考えを聞くために二種類の聞き取り調査を実施した。一つ目の調査は、平成30年11月11日(日)に南総地区と加茂地区を訪れ、農作業中の住民に対して行ったもので、50代～80代の男女15名に話を伺うことが出来た。

まず、農村部の魅力について話を伺うと、最も多く挙げられたのは「魅力はなにもない」という意見であった。「筆者(20代)のような若者は皆、都会へ出てしまう。田舎には何もないから仕方がない」という声も聞かれ、若者が少なくなることで、地域全体の活気が失われてしまっている印象を受けた。また、市民意識調査の結果、市原市で最も魅力的であるという結果になった「関東一紅葉が遅い養老溪谷などの豊かな自然」については、「同じ南部地域ではあるが、養老溪谷と田園地帯とでは事情が違う」という意見が出された。「養老溪谷には、紅葉などの観光名所のほか、温泉施設等があることから、外からの観光客を呼び込むことが出来るが、他の南部地域はそのような設備がない」「養老溪谷は魅力に感じるが、同じ地域という認識よりも、むしろ近場にある観光地として自分たちも訪れる側になっている」という声が聞かれた。

次に、農業の今後について尋ねたところ、「代々受け継いできた自宅を守るためにも、出来れば家族に継いでほしい」という意見が多かったが、後継者が決まっている農家は少なく、「後継者として考えている家族はいるが、別居しているため継いでくれるか分からない」「自分の代で農業は終わり」というネガティブな意見が中心であった。また、「子供達に負担をかけないためにも、耕作していない農地を早く手放してしまいたい」という意見も聞かれ、農地の現状としても「高齢のため体力的にきつい」等の理由から、半数以上の農家が「耕作していない土地がある」という回答であった。

南部地域の活性化に関しては、「若い人が来て、地域が元気になってくれるのであれば嬉しい」という意見が多く聞かれる一方で、「こんな場所に若い人は来ない」という意見や、「もし元気になってくれたらありがたいが、自分は今の暮らしで満足しているので、自分から何か行動を起こすつもりはない」という意見が挙げられた。

しかし、南部地域を活性化させるため、機会があればぜひ農業体験や農家民泊等の取り

組みをしてみたいと考えている農家の方もおり、話を伺うことが出来た。その方からは、「地域には元気になってほしいと思っているが、みんな誰もやっていないことには非常に抵抗がある。そもそも知識が無く、何から始めたら良いか、誰に相談したら良いのかも分らない状態である。きっと自分と同じ思いの人がいるはずなので、出来れば同じ考えを持つ者同士で集まって話をしてみたい。なにかを始める時には、一緒に協力しながらやれる仲間がいれば非常に心強い。」という意見が出された。

## (2) 若者への聞き取り調査

二つ目の調査は、南部地域の若者の考えを聞くため、平成30年12月31日(月)に加茂地区を訪れ、20代～30代の住民4名に対して聞き取りを行った。

まず、農村部の魅力については、農業従事者への調査結果と同じく「魅力はなにもない」という意見が中心であり、「商業施設が少なく、交通の便も悪いため日常生活が不便である」という理由によるものが多かった。また、地域の課題として、「消防団等の地域活動について、高齢化が進んでいる。同世代の若者の力が必要だが、その担い手がない」や、「住民が集まる場所や機会が少なくなり、以前と比べ地域の絆が薄れつつある」というものが挙げられた。

しかし、南部地域の魅力として、「ゴルフ場の多さ」という回答もあり、その理由を尋ねると、「以前は身近すぎてあまり魅力を感じていなかったが、ゴルフを目的に市原市を訪れたことがきっかけで加茂地区内に別荘を建てた人との交流を通じて、自分自身も魅力を感じるようになった。同じようにゴルフや観光で南部地域を訪れた人が、一人でも多く魅力を感じるようになり、今後は別荘だけではなく、地区内に定住してくれるよう期待したい。」という話を伺うことが出来た。また、南部地域を活性化させるための活動については、高齢者中心の農業従事者とは異なり、「自分自身も力になれることがあれば積極的に行動を起こしたい」という意見が多く挙げられた。

## 6. 現在の市の取り組みと今後の事業のポイント

これまでの調査結果を踏まえて、現在行っている取り組みの確認と現状分析を行う。

市では、「世界に一番近い“SATOYAMA”プロジェクト」を中心に、南部地域の観光産業開発や、農業の課題解決に向けた取り組みとして、以下のような事業を実施しており、徐々にその成果が見え始めているものもある。

### ①公共交通機関を取り入れた観光施策

市内を縦断する小湊鉄道を観光に取り入れ、駅舎や車両などを活用した観光地作りを行うことで、減少傾向にある鉄道の乗客数の増加に繋げ、南部地域に住む住民の公共交通機関の維持を目指す。

### ②有害鳥獣対策

県内でもワーストとなっているイノシシの農産物への被害額からもわかるように、野生動物は農業の大敵であるが、現在もその生息区域は拡大しているため、さらなる対策が求められている。そこで、捕獲したイノシシなどを活用した料理メニューや土産品を開発し、

観光客に提供することで、新たな経済循環を目指す。

### ③南部地域の農業生産関連事業の推進

過疎化が進んだ南部地域での 6 次産業化や農業体験など、豊富にある地域資源を活かした活動や、観光客との交流を活性化させ、高齢者の生きがいつくりや農業従事者の所得の増加を目指す。

#### (1) 取り組みの現状について

これまでの取り組みの結果、①公共交通機関を取り入れた観光施策については、小湊鉄道が観光客向けのトロッコ列車の運行を開始したことにより、乗車人数が大幅に増加し、観光コンテンツとしての魅力を引き出すことに成功している。また、②有害鳥獣対策についても、イノシシなどを活用したジビエ料理でこれまでに19品の新メニューの開発を行うなど、捕獲した野生動物を活用した料理や土産品づくりが活発になりつつある。

しかし、③南部地域の農業生産関連事業の推進については、あまり効果が出ているとは言えない。①・②の施策に力を入れ、成果が見えつつある一方で、農業生産関連事業を行っている農家数は、未だ増加には至っていない現状である。また、観光入込客数は徐々に減少しており、魅力が高まっている観光資源もあるものの、南部地域を訪れる観光客の増加には至っていないため、これらをいかに結びつけ、里山の持つ魅力や価値を引き出し、活性化に繋がられるかが課題である。

#### (2) 今後の事業のポイント

以上の調査結果を踏まえ、市原市の南部地域の豊かな自然を活用したまちづくりのために今後必要となる事業のポイントをまとめる。

まず 1 点目は、里山などの田園風景の持つ魅力を引き出し、発信することである。市民意識調査では、南部地域にある観光地の魅力についての意見が多く出されたが、地域に住む住民は、自分の暮らしている地区にはあまり魅力を感じておらず、普段生活している里山と、外部から観光客が訪れる観光地との間に、大きな意識の差があるように感じられた。また、田舎暮らし情報の発信をしてほしいという意見も多く寄せられていることから、地域の魅力を引き出した上で、外部に発信出来る存在が求められていると考えられる。

2 点目は、耕作放棄地の増加や人口減少に対抗するための、若者と農村を繋ぐ架け橋づくりである。住民からは、高齢のため耕作出来ない土地があり耕作放棄地となっている現状や、若い人に来てもらいたいと呼び込むための魅力がない、という意見が出されている一方で、農村部以外の地域に住む若者の意見では、農村に対する魅力は年々増しており、農業体験等をしてみたいという声が多く挙げられていることから、南部地区へ若者を呼び込むためのきっかけ作りが求められる。

3 点目は、農業生産関連事業を普及させるための環境整備である。限られた農地を生かし、農村部を活性化させるためには、より収益性の高い農業生産関連事業の実施が不可欠である。しかし、市内では農産品の加工や農業体験、農家民泊などが普及していない現状であり、これらの事業を実施したいと考えている住民もノウハウがなく、躊躇してしまってい



ることから、相談する相手や住民の活動を支えるサポーターの存在が必要であると考えられる。

## 7. 具体的施策の提言

### (1) 市原市地域おこし協力隊の活用

市原市全域では著しく過疎化が進んでいるとは言えず、条件不利地域には指定されていないため、地域おこし協力隊の派遣条件は満たしていない。しかし、前述のとおり地区ごとに環境が大きく異なり、特に市の南部地域では少子高齢化や人口減少が急速に進行している。そこで、市では独自の事業として「市原市地域おこし協力隊」を導入し、持続的な地域づくりに努めている。実施事業等は通常の地域おこし協力隊と同じく、過疎地域に住み、その地域で活動する団体や住民と協力関係を築きながら、新たな視点で里山での生活などの情報発信や、地域の資源を活かした起業を目的とする活動を行うもので、平成 29 年度に開始され、29 年度と 30 年度にそれぞれひとりずつの受け入れを行っている。

今後さらに受け入れ人数を拡大する予定であり、行政では受け入れ地域や人材の選定をしているが、現在は観光地としての魅力を持つ養老溪谷と南総地区の中心部での受け入れを行っている協力隊を、それらの中間地点である加茂地区の農村地帯についても配置することが望まれる。市民意識調査の結果からも、居住年数が短い住民は里山などの田園風景に対して魅力を感じる割合が高かったことから、すでに魅力を引き出すことが出来ている地域だけでなく、これから魅力を引き出す必要のある地域にヨソモノを招き入れ、新たな視点で見て感じた魅力を発信することで里山の魅力を引き出すことに繋がると考える。例えば、平成 29 年に協力隊に参加し養老溪谷で活動する高橋氏は、市原市南部地域の菜の花畑に魅力を感じ、自分自身がその風景を生み出す側に立ちたいと感じたことから活動を開始し、現在では地域の住民を巻き込み、菜の花の種植えや菜種油の製造・販売、今後の担い手の確保に努めている。このように、協力隊の活動のサポートに行政だけでなく、地域の住民や団体が参加することで、協力隊の活動を中心に地域の魅力や課題を「じぶんごと」として考えることが出来る環境づくりにも繋がるのではないだろうか。

また、近隣のいすみ市の地域おこし協力隊の活動事例では、有害鳥獣対策の一環として、捕獲した野生動物の皮を利用した商品開発や、住民向けのクラフト講座を開き、農業の大敵である野生動物の捕獲意欲を高めるだけでなく、名産品等の商品開発にも繋げている。このように、地域の弱みを把握した上で、それを補い、新たな強みに変えることが出来るスキルを持った人材を受け入れることが出来れば、さらに効果的であると考えられる。

### (2) ゴルフ場を活用した農村体験

次に、日本の自治体では最も多い 32 のゴルフ場についても活用方法を考える。現在、市原市の交流人口の中心は観光入込客であり、中でもスポーツ・レクリエーション関連が全体の約 7 割を占めている。特にゴルフを目的に市原市を訪れる来訪者の割合が多いが、その数も近年は伸び悩んでいる。また、平成 28 年に行われた観光アンケートの結果では、市原市を訪れた観光客のうち、宿泊を伴う滞在と回答した者の割合は約 13.6%であった。ア

クアラインや圏央道の開通により、都心からもアクセスしやすくなったため、ゴルフ客を中心とした関東近郊から訪れる日帰りの観光客がメインであると見られるが、今後の来訪者を増やすための取り組みとしても、更なる付加価値づくりが求められる。

現在、市ではプロゴルファーが中心となり、毎年夏休み期間の小・中学生にゴルフの楽しさを伝えるための教室を開くことで、今後のゴルフ人口を増やすための取り組みを実施している。市民意識調査の結果からも、ゴルフ場等を活用したスポーツに関する事業は若者から大きな支持を受けているが、同世代からは農村での生活体験をしてみたいという意見も多く挙がっている。そこで、ゴルフ場が数多く存在する南部地域の更なる魅力を伝える機会を獲得するためにも、行政が受け付け窓口としての機能のほか、現在の事業の実施主体であるゴルフ場と、地域住民や地域の持つ魅力などを繋ぐ役目を果たすことで、ゴルフ体験と合わせて農業体験を行えるプランや、農家に宿泊して生活を体験することが出来るプランなど、今後の地域発展にも繋げられるようなプランの提案が可能となる。また、市外から多くの来訪者が訪れることから、地域の情報発信や農産物を加工した土産品等の販売の場としても、ゴルフ場活用の可能性があると考えられる。

### (3) 廃校を活用した取り組み

しかし、前述のようなプランの提案には農家側の協力が不可欠であるが、今回の調査結果からは農産物の加工販売のほか、農業体験や農家民宿等のグリーンツーリズムの実施に至るまでのノウハウ、その後の活動をサポートするコーディネーター、情報交換ができる仲間について必要としているという課題が見えており、これらの課題を解決するためには、農業従事者をはじめ、その協力者が知識を得ることが出来るスクールや、同じ考えを持つ者同士で集まる事が出来る場づくりが求められる。

そこで、生徒数の減少から平成25年に廃校になった4つの小学校を活用したい。これらの小学校はすべて加茂地区内に位置しており、交通の便が悪く、高齢化が進んだ地区内においても、比較的住民のアクセスが良いと考えられる。この小学校で、既に農産物の加工販売やグリーンツーリズムを実施している農家や、地域のコーディネートに関する知識を持つ講師を招いた教室を継続的に実施するほか、教室を開いていない期間には地域住民が自主的に集まり、意見交換や連携を深められるような通いの場を作ることで、地域づくりへの意識を高めることが出来るのではないだろうか。

また、現在これらの小学校やその周辺の古民家等を活用した事業として、地域の資源とアートを融合させた芸術祭「いちほらアートミックス」というイベントが開催されている。このイベントは、様々なアーティストを呼び寄せ、過疎化が進んだ南部地域に新たなプラットフォームを創出し、自然とのふれあいや地域の農産物の消費から、まちづくりに繋げることを目標にしている。しかし、市民意識調査の結果では、この事業を支持する声は全市民の2.7%、開催地である加茂地区の住民でも3.2%と非常に少ない現状である。理由として、実施期間が非常に短い(平成30年度は約2週間)ため、持続的なまちづくりのために有効であるかが不透明であることが考えられるが、このイベントに地域の住民を巻き込むことを提案する。外部から呼び寄せたアーティストに外部から来た観光客をもてなして

もらい、ボランティアとして住民を参加させる現在の形ではなく、地域住民がイベントに主体的に参加できるように環境を整えて参加者の募集を行うなど、行政がイベントと住民を繋ぐ役割を果たすことで、地域のことを良く知る住民による魅力発信の場として、先程の教室で学んだ農産物の加工食品の販売や、周辺地域のグリーンツーリズムの情報発信機能等を付けることができ、イベントを中心に地域が一体となって農業に従事するようになり、イベント自体の価値も向上させることが出来るのではないだろうか。また、地域が一体になることで、大根づくりを地域で盛り上げている姉崎地域のように、その地域にしかない新たな魅力やブランドの創出にもつながるのではないかと考える。

#### 8. おわりに

今回、市原市内でも特に過疎化が進む南部地域をテーマに、里山を活用したまちづくりのための課題や具体的施策の提言をまとめ、本レポートを作成した。

レポート作成の過程で南部地域に住む住民からは、地域に対しての危機感を持っているが自分自身は何もするつもりはない、という声も聞かれたが、今後の地域発展のためには、より多くの住民が地域の課題を「じぶんごと」として捉え、課題解決のために一丸となって協力してくれるような環境作りこそが、活性化に向けた第一歩であると思う。

最近では、少しずつではあるが、里山の持つ魅力に惹かれ南部地域に移住する方も出始めている。都会に住んでいる時には感じられなかった心の豊かさを感じられる場所、日々生きる意味を感じながら自然と共に生活が出来る場所、というこの環境をこれからも失う事がないよう、その魅力を引き出しながら大切に守っていききたい。

最後に、今回提言を行った農業生産関連事業やグリーンツーリズム等の普及はあくまでも手段であって、目的ではない。全ての住民が地域に誇りと愛着を持って生活出来ることこそが、真の目的であるということをお忘れずに、私自身も行政職員としての立場だけではなく、一人の住民としてこれらの活動に参加し、次世代の里山の担い手になれるよう、生まれ育った地域の活性化のためにこれからも尽力していききたい。

#### 【参考資料・ホームページ】

- ・市原市（2016）『市原市まち・ひと・しごと創生総合戦略』
- ・市原市（2016）『市原市人口ビジョン』
- ・市原市（2017）『市原市農林業振興計画』
- ・市原市（2017）『市原市観光振興ビジョン』
- ・市原市広報広聴課（2015）『市原市民意識調査』
- ・農林水産省（2015）『農林業センサス』
- ・市原市社会福祉協議会ホームページ <http://www.ichihara-shakyo.or.jp>（2019年1月17日アクセス）
- ・市原市役所ホームページ <https://www.city.ichihara.chiba.jp/>（2019年1月17日アクセス）

別添資料

地区	平成 20 年 (人)	平成 30 年 (人)	増減数 (人)	増減率
市原	52,833	51,817	-1,016	-1.9%
五井	84,982	87,218	+2,236	+2.6%
姉崎	30,631	29,340	-1,291	-4.2%
ちはら台	19,128	26,338	+7,210	+37.7%
市津	13,742	13,847	+105	+0.8%
辰巳台	12,579	11,758	-821	-6.5%
三和	16,543	14,341	-2,202	-13.3%
有秋	15,403	14,376	-1,027	-6.7%
南総	27,431	22,879	-4,552	-16.6%
加茂	6,685	5,125	-1,560	-23.3%
合計	279,957	277,039	-2,918	-1.0%

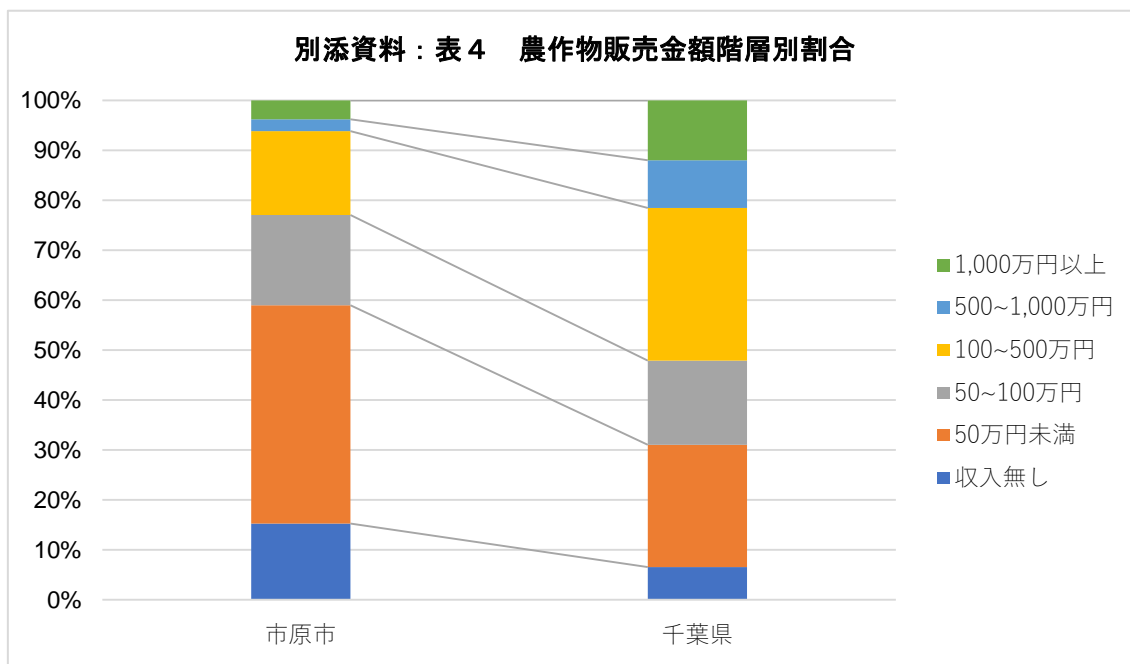
出典：市原市人口統計（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成

	平成 17 年	平成 27 年	増減数	増減率
農家数	4,954 戸	3,661 戸	-1,293 戸	-26.1%
経営耕地面積	3,288ha	2,809ha	-479ha	-14.6%
耕作放棄地面積	1,227ha	1,446ha	+219ha	+17.8%

出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成

	平成 17 年	平成 27 年	増減数	増減率
市原市	0.99ha	1.30ha	0.31ha	+30.7%
千葉県	1.22ha	1.86ha	0.64ha	+52.5%

出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成



出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成

**別添資料：表 5 農作物販売金額階層別農家数**

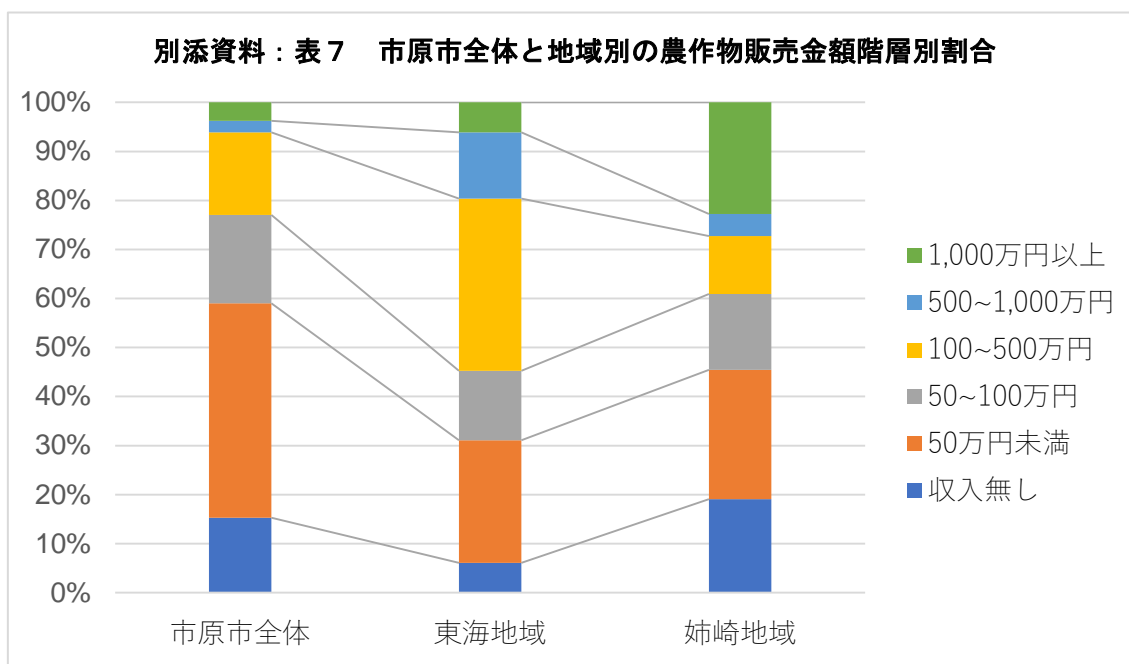
農作物販売金額	市原市		千葉県	
	農家数（戸）	割合	農家数（戸）	割合
1,000万円以上	82	3.8%	5,366	11.9%
500~1,000万円	51	2.3%	4,305	9.6%
100~500万円	367	16.8%	13,761	30.6%
50~100万円	394	18.1%	7,578	16.8%
50万円未満	954	43.7%	11,026	24.5%
収入なし	333	15.3%	2,949	6.6%
合計	2,181		44,985	

出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成

**別添資料：表6 兼業農家数および割合**

調査年	農家数	専業農家	兼業農家	第一種兼業	第二種兼業
2000年	5,617	503	5,114	234	4,880
2005年	4,959	557	4,402	152	4,250
2010年	4,434	582	3,852	218	3,634
2015年	3,661	598 (16.33%)	3,063 (83.67%)	103 (2.81%)	2,960 (80.85%)
千葉県 2015年	62,636	13,474 (21.53%)	49,162 (78.47%)	7,168 (11.43%)	41,994 (67.04%)

出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成

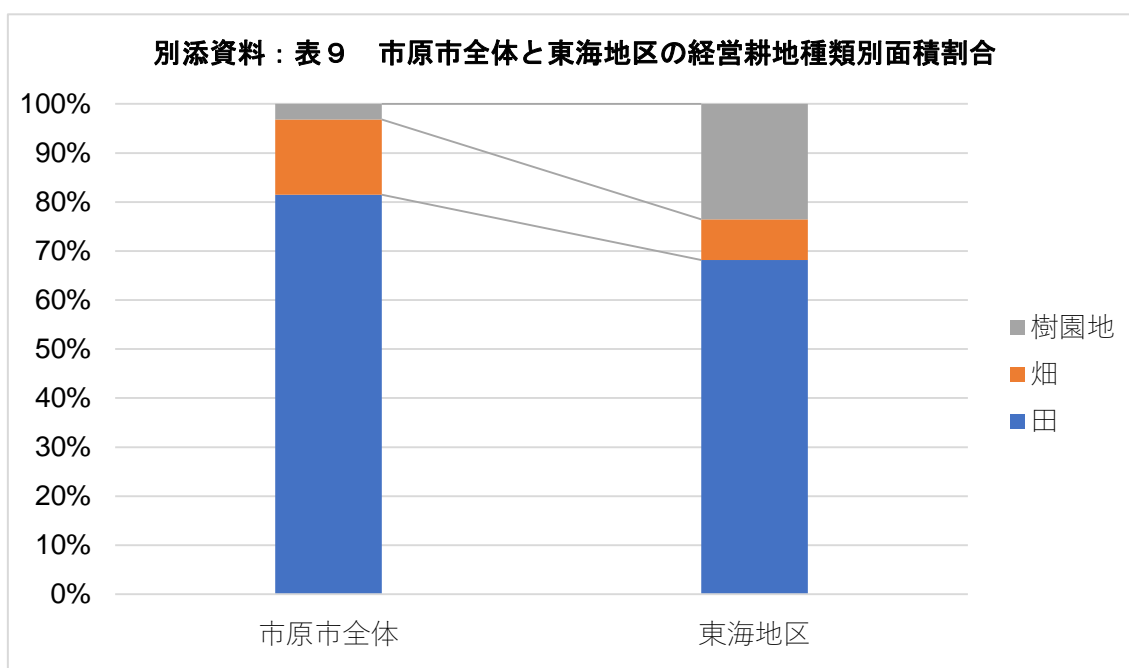


出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成

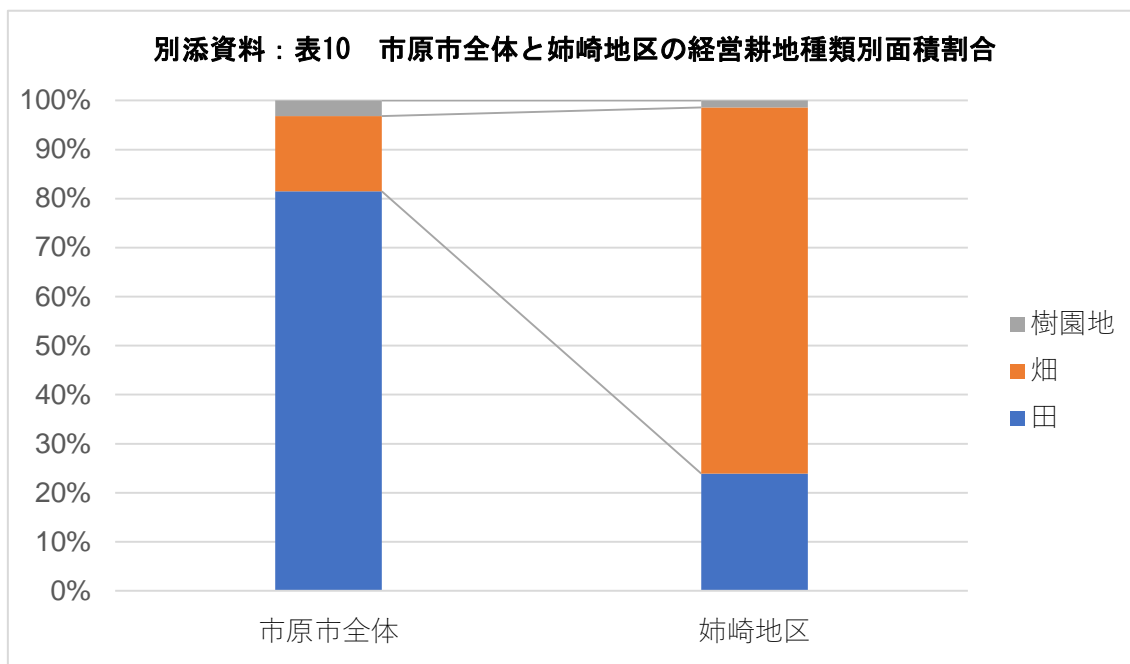
**別添資料：表 8 市原市全体と地域別の農作物販売金額段階別農家数**

農作物販売金額	市原市		東海地域		姉崎地域	
	農家数（戸）	割合	農家数（戸）	割合	農家数（戸）	割合
1,000万円以上	82	3.8%	9	6.1%	25	22.7%
500～1,000万円	51	2.3%	20	13.5%	5	4.5%
100～500万円	367	16.8%	52	35.1%	13	11.8%
50～100万円	394	18.1%	21	14.2%	17	15.5%
50万円未満	954	43.7%	37	25.0%	29	26.4%
収入なし	333	15.3%	9	6.1%	21	19.1%
合計	2,181		148		110	

出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成



出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成



出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成

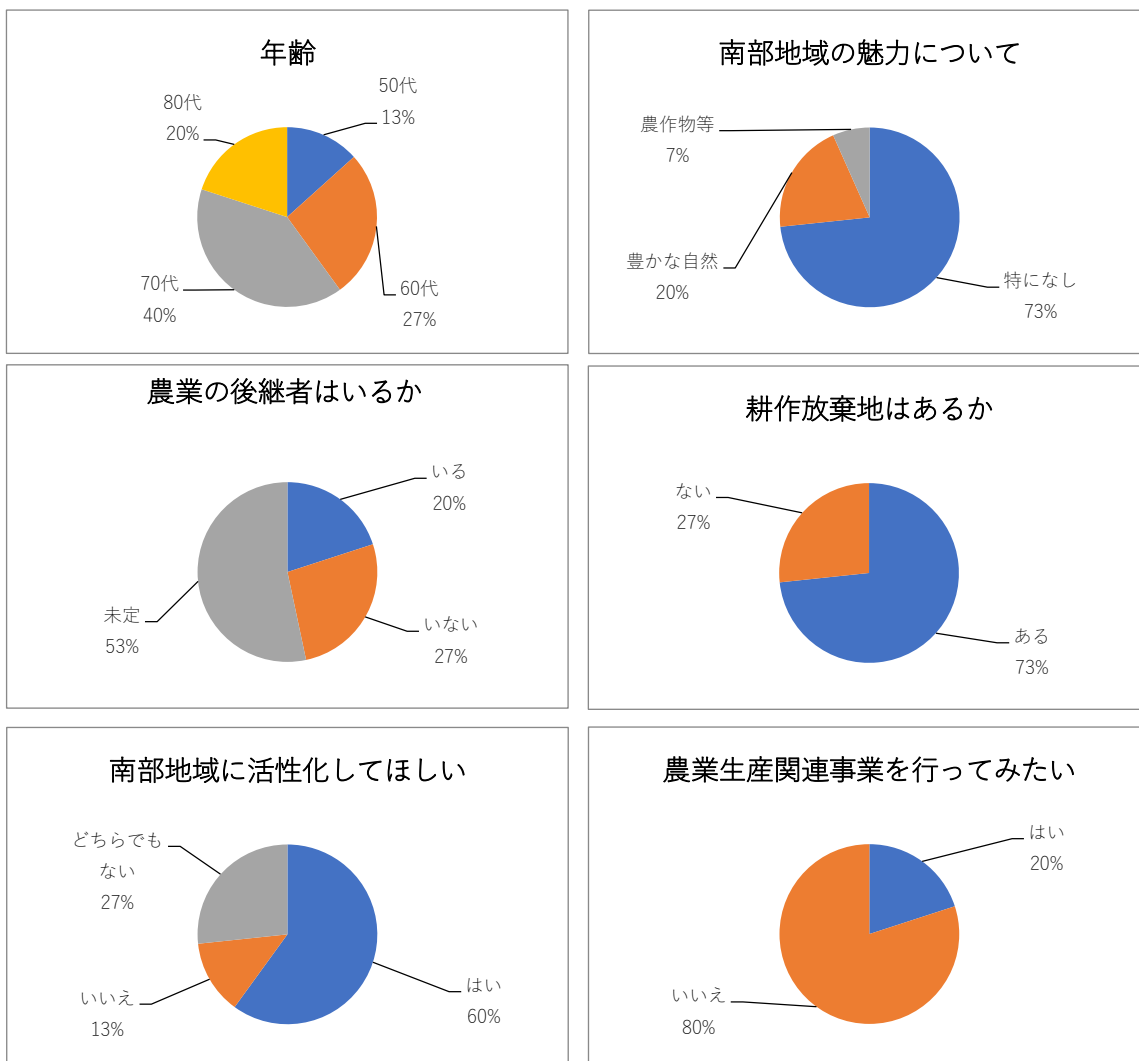
別添資料：表11 農業生産関連事業の種類と農家数（戸）

総数	関連事業を行っていない	関連事業を行っている	関連事業の種類					
			農産物の加工	直接販売	貸農園 体験農園	観光農園	農家 民宿	その他
2,142	1,723	419	10	416	0	1	0	1

出典：市原市統計書（市原市役所ホームページ）をもとに筆者作成



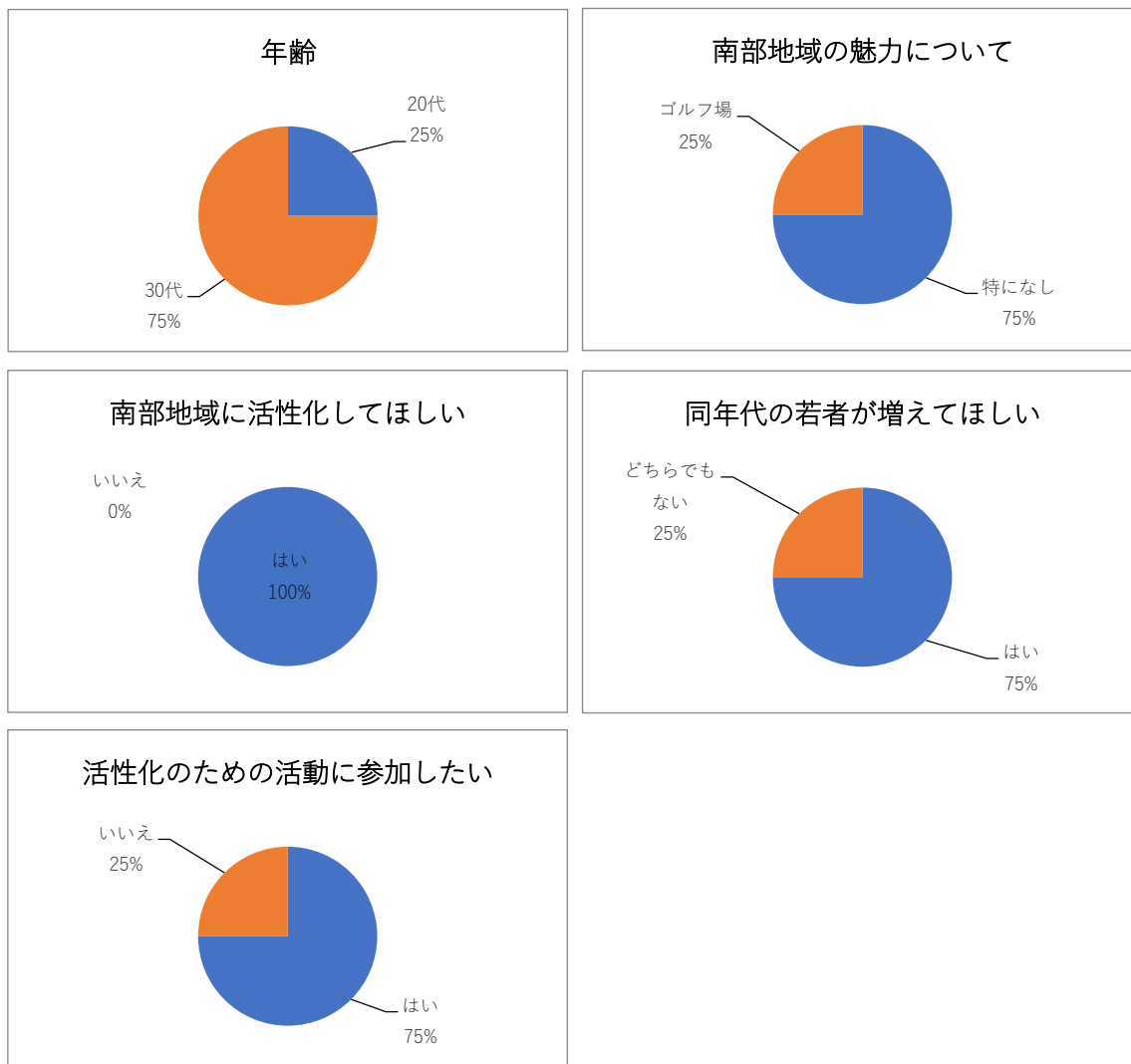
農業従事者への聞き取り調査結果



主な意見 (Main Opinions)

- ・若者が興味を持つようなものが地域にないため、若者は都会へ出て行ってしまおう。
- ・養老溪谷等の観光地とは異なり、一般的な農村部には魅力がない
- ・農業について、後継者として考えている家族はいるが、別居しているため継いでくれるかどうか分からない
- ・高齢のため、自分達だけでは全ての土地を耕作しきれない
- ・地域には元気になって欲しいと思っている
- ・自分自身から地域活性化に繋がる行動を起こすつもりはなく、誰かにやってもらいたい

### 加茂地区の若者への聞き取り調査結果



### 主な意見

- ・ 商業施設が少なく、交通の便も悪いため、日常生活が不便である
- ・ 消防団等の地域活動における担い手が不足している
- ・ 住民が集まる場所や機会が減っており、地域の絆が薄れてきている
- ・ 引越し等で地域から出てしまう若者が多く、同世代とのコミュニケーションが取れない
- ・ 地域の魅力を発信し、同世代の若者を地域に呼び込んで欲しい
- ・ 地域活性化に繋がる活動について、力になれることがあれば積極的に行動を起こしたい